孤立を防ぐ「地域づくり」実践

滋賀県東近江圏域　2022年12月15日開催号

就労支援と地域支援

～東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”～

野々村光子さん（左）の相談風景

目次

Tekito- がたいせつにする地域と人の思い……2
その人も家族も孤立させない……4
100年後も「いい会社やな」と言われるために…6
「働く」は人生の一部分 ……8

Tekito- カレンダー

≪研修のご案内≫

2022年12月15日（木）14：00～16：30

「就労支援と地域支援」

ゲスト……東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”　センター長　野々村　光　子
コメンテーター……NPO法人地域の寄り合い所また明日（東京都小金井市）　代表　森　田　眞　希
コーディネーター…淡路市社会福祉協議会 事務局長　凪　　保　憲

480社に及ぶ企業・事業所と連携し、障害のある人やひきこもりの人の就労と生活の支援を行っています。

市民活動が活発な東近江市の地域性を活かし、さまざまな企業・事務所・市民活動との出会いから、障害分野以外の地域課題にも取り組んでいるのが特徴です。「その人の適当を大切に。すべての人がその人らしく働き・暮らせること」が信条。

お申込み方法はこちらから➡　https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop

Tekito- がたいせつにする地域と人の思い

東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”は、滋賀県の南東部に位置し、東に鈴鹿山系、西に琵琶湖に挟まれた東近江市、近江八幡市、竜王町、日野町の２市２町をエリアとしています。

東近江市は、安土城の城下町として栄え、市内には、臨済宗の大本山である永源寺、湖東三山の１つの百済寺などの名所旧跡があることでも有名です。

近江八幡市は、安土城を擁し、中山道の武佐宿としても栄えてきました。また、琵琶湖の有人島である沖島を有しています。

近江牛発祥の地と言われる竜王町は、豊かな自然に恵まれたまちですが、近年は名神高速道路の竜王インターチェンジを核とした交通網の整備も進められています。

日野町を発祥地とするカブラの一種「日野菜」は、室町時代には天皇に献上され、以後、現在に至るまで日野町の特産品として人気を博しています。850 年以上も続く「日野祭」は、湖東地方最大の春祭りです。

このように、自然に恵まれ、歴史の重要な基点ともなる東近江圏域は、中世には交通の要衝の地として栄え、江戸から明治時代にかけては、「買い手よし・売り手よし・世間よし」の「三方よし」を理念とする近江商人が活躍しました。近江商人は、現在に至るまで多くの企業家を生むと同時に、現代にも「相手よし・自分よし・みんなよし」とその精神が受け継がれています。

東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”
住　　所：滋賀県近江八幡市上田町 1288-18　前出産業ビル２Ｆ
電話番号：0748-36-1299　　FAX：0748-36-1344

【東近江市】	【近江八幡市】	【日野町】	【竜王町】
2022 年 10 月末日現在	2022 年 10 月末日現在	2022 年 11 月 1 日現在	2022 年 10 月末日現在
人　　口　112,672 人	人　　口　82,008 人	人　　口　21,005 人	人　　口　11,600 人
世 帯 数　46,381 世帯	世 帯 数　35,102 世帯	世 帯 数　8,578 世帯	世 帯 数　4,497 世帯
高齢化率　27.1%	高齢化率　27.7%	高齢化率　30.6%	高齢化率　28.1%
年少人口率　13.2%	(2020 年 10 月 1 日現在)	(2020 年 10 月 1 日現在)	(2020 年 10 月 1 日現在)
	年少人口率　14.0%	年少人口率　12.3%	年少人口率　12.8%
	(2020 年 10 月 1 日現在)	(2020 年 10 月 1 日現在)	(2020 年 10 月 1 日現在)

働き・暮らし応援センターの業務

「働き・暮らし応援センター“Tekito-”」（以下、Tekito-）は、滋賀県東近江圏域（東近江市・近江八幡市・日野町・竜王町）における障害者就業・生活支援センターの機能をもつ相談支援機関として 2006 年に開設されました。厚生労働省の委託事業である障害者就業・生活支援センターは、障害者の身近な地域において就業面と生活面の一体的な相談・支援を行う支援機関で、2022 年４月現在、全国に 338 か所（滋賀県内には７か所）が設置されています。

すべての人がその人らしく働き、暮らせる地域づくりを目指し、一般企業での就労を希望する障がいのある人と、障がいのある人の雇用に取り組む（これから取り組もうとしている）企業に対する相談・支援を行い、障がいのある人の雇用の促進及び安定を図ることを目的としています。

働き・暮らし応援センターは、滋賀県および市町からの補助事業として実施しています。障がいのある人の「働く」こと「暮らす」ことを一体的にサポートする専門機関です。

就業面での支援としては、たとえば、就職に向けた準備支援（職業準備訓練、職場実習のあっせん）、就職活動の支援、職場定着に向けた支援、障がい特性を踏まえた雇用管理についての事業所に対する助言、関係機関との連絡調整などが挙げられます。

また、生活面での支援として、生活習慣の形成や健康管理、金銭管理などの日常生活の自己管理に関する助言、住居・年金・余暇活動など地域生活や生活設計に関する助言、関係機関との連絡調整が挙げられます。

働き・暮らし応援センターには、就労支援ワーカー、生活支援ワーカー、職場開拓員、就労サポーターなどが配置され、関係機関と連携して支援に取り組んでいます。

「働きもん」を応援する

Tekito- では、「働きたい」という障がいのある人だけでなく、自宅で充電中の人の「働きたい」こと、そして「働きたくない」ことも応援しています。彼ら・彼女らのことを Tekito- では「働きもん」と呼び、働きもんたちと「働きたい」や「働きたくない」を毎日、一緒に考えています。

2006 年、Tekito- は、センター長の野々村光子さんが一人でスーパーマーケットの一角に相談窓口を構え、スタートしました。「働くことに少しの応援と工夫があればその人らしく働けることを応援できる」という信念のもと、「働きたい人」を募集します。すると、80 歳代の女性が来て、「うちの息子は『働きたい』と言っているけれど、いま 50 歳で、30 年くらい家にひきこもっている」と言います。そうした人が次々に訪れると、「働きたいという人が地域にこんなにたくさんいる。なんてラッキーなんだと思った」と野々村さん。

ですが、企業にとって障がいのある人の雇用は想像以上にハードルが高いことに、間もなく気づくことになりました。「企業は障がい者を雇用することは想定していない、障がい福祉の現場でも、障がい者を企業で働かせるんてとんでもない、という風土だったんです」と振り返ります。

働きたい人のニーズが確実に高まっているなかで、「福祉よりも、企業の社長たちと話し合って一緒にやっていったほうがスピーディーに進むのではないか」と考え、企業の社長たちと話し合いの場を持つようになり、現在約 720 社の地域の企業とつながりをつくるまでになりました。

人生を切り取らない

困っている人が相談窓口に来るということは、世間体が悪い、と考える風土があり、「特に生活に困っているという相談はなかなか届くことが難しい」と野々村さん。ですが、「働きたい」ということならば相談がしやすい。スーパーマーケットの一角から、企業のビルの２階に窓口を移した現在も、「相談に来るのではなく、仕事に来ているような顔で入ってこられる」と言います。

「働きたい」をキーワードに、たくさんの働きもんが Tekito- に集まり、現在は約 1,000 人が集まっていますが、その多くは制度の対象にならない、障がい者手帳を所持していない人たちです。ひきこもり歴が 20 ～ 25 年という人が働きもんの大半を占めています。

Tekito- で一番たいせつにしていることは、「働くということを、人生から切り取らないこと」。働くことを人生から切り取って考えるのではなく、その人の人生のなかに、本人にとってちょうどよく、少しのゆとりがあって自分に合っているという働き方を応援したいと考えています。

その人も家族も企業も孤立させない

その人の「素敵」を見つける

とはいえ、相談の面談の時間に、「今日は何をしていた？」と聞いても、「テレビを観ていた」。「昨日は？」「テレビを観ていた」。「明日の予定は？」「テレビを観ます」という会話が続くと、「その人のかっこいいところ」「この人の輝いているところ」を見つけることは簡単ではありません。「この人のいいところはテレビを毎日観られる、という以外に見つけられない、それではあまりにしんどかった」と野々村さんは言います。

図書館の葉刈り作業

そんな折、東近江市内の図書館の庭の葉刈りの仕事の依頼がありました。「契約書にハンコを押してしまった。やらなきゃならないから助けてほしい」と働きもんたちに声をかけ、清掃に取り組むことになりました。

当初は、「そんなことできない、やったこともない」と言っていた人たちが、「次は何をしますか？」と聞いてきたり、人が通るときにホウキを掃く手を止めるなど、「この人の『素敵だな！』と思えるところをたくさん目の当たりにした。それが見つけられるのが地域なんだと実感した」と言います。

さらに、「次回はいつやるの？」と聞かれたときに、「この人の人生に、次の予定が入った瞬間でした」と野々村さん。働きもんたちの思いに背中を押され、「手作業でやるからには、どこよりも美しくしよう」という Tekito- の仕事ぶりが評判を呼び、「ニンジンを引いてほしい」「空き家をなんとかしてほしい」という依頼が増えていきます。任意団体の「チーム困救」を設立し、地域の困りごとを解決するチームが始動する契機となりました。

近江牛の世話をする

「たとえば、少年院を退所したその日に、地域の草刈りの仕事があればそこで働いてもらっている。地域にその人を応援するアイテムがたくさんあることは、その人のためではなく、地域のためなんです。地域が存続していくための仕事をその人が担っている、ということを、本人が自覚して取り組んでいくことがなによりも大事なこと」と野々村さんは語ります。

本人から見える景色を考え抜く

Tekito- では、「本人から見える景色がどう見えているのかを考えて考えて考え抜こう」と言っています。障がいとはなにかを教えることもなければ、決まったやり方もありません。それは、一人ひとり持っている物語が違うこと、そして、その人の暮らしを制度の枠にあてはめないということを大事にしているからです。

ニンジンの収穫作業

Tekito- では、課題解決型でもなく、ステップアップ方式型でもなく、オーダーメイドの応援を大事にしています。仕事には適材適所があり、その人にとってのちょうどいい働き方があり、さらに人生という長い物語のなかで働くことだけを切り取らない。

「あいさつができたから次」ではなく、「あいさつはできなくてもニンジンは引ける」。「まず居場所に来て」では、居場所に来たら次はここでおしゃべりをしましょう、その次は軽作業、その次は就職相談、という「支援者側から見たステップアップになってしまう」と言い切ります。

家にひきこもっていたBさんに、「なんで出てきたの？」と聞いたところ、「野々村さん、僕がなんでひきこもっているかに興味なかったでしょ」と言われたことも。Bさんは、「誰もが僕が部屋にいることに興味を持っていて、部屋の外に僕を連れ出そうとしていた。僕は、部屋のドアをあけたら、その先に階段があると思っていた。部屋を開けたら次は親と食事をしましょう、その次はお風呂に入りましょう、その次は外出しましょう、その次は買いものをしましょう、そんな階段があると思っていた。だから、僕はドアを開けることはできたけれど、開けなかった。だけど野々村さんはそんなことには興味がなかったでしょう。部屋に入ってきたときに、『20年も部屋にいるのにきれいにしてるなー』って言ったんです。野々村さんが開けたドアの隙間から見えたのは、階段ではなくて廊下だった。だから出られたんです」と。

介護施設で働く

本人にとってのオーダーメイドを考えるために、「目にしたもの、聞いたこと、感じたことはすべて情報。そうでないとやり方はわからないし、そのためにひたすら考えます。それでも、失敗することが多いんですよ。失敗したら、また考える。考えて考えて考え抜く。それがTekito- です」と野々村さんは続けます。

家族以外の人との会話

丸太をチェーンソーで玉切りする

Tekito- への相談がつながる経路は、親戚や民生委員、さらに軽犯罪を繰り返してきた人は弁護士からつながる場合もあります。もちろん、同居する親からの相談もあれば、支援のなかで親と関わる場面もたくさんあります。

そんな関わりのなかで、家族からは「もう来ないでください」と言われたことも。「本当に来ないでください、来たと知られたら夫に私が怒られます、と言われても、また明日来ますね、と言って行くんです」と野々村さん。「昨日、来ないでと言ったのに、なんでまた来るんですか？と言われて。その繰り返しですよ」と言います。

来るなと言われても行って、お茶を飲んで帰ってくる、そんな野々村さんには、ひとつの思いがあります。

「家族の会話を、２階でひきこもっている子どものことだけにしたらいけない」。子どもは子どもの人生を生きている、その場所はたまたま２階の自室であるけれど、両親がそこに人生をささげるのではなく、自分たちの人生を生きなければならない。そのためには、「たとえ『今日もあの迷惑な人が来た』と言われても、実はそれが 20 年ぶりの、息子以外の他人のことの会話だったりするんです。親にしかできない応援はもちろんあるけれど、親がしてはいけない応援もあって、そういうことははっきりと伝えています。そして、誰の人生にも、人生にミスは１個もないということは必ず言い切ります」と胸を張ります。

１００年後も「いい会社やな」と言われるために

地域の会社をつぶさない

薪割りの風景

Tekito- が行う企業とのマッチングの特徴的なところは、本人のタイミングに合わせていつでも見学ができる事業所を数多く持っていることにあります。たとえば、家から出ずに長い時間を過ごしている人にとって、工場がどういうところかを想像することは難しい。求人票を見せて面接や実習をするのではなく、「工場って油のにおいがするのを知ってる？」「どんなにおいか見に行ってみようか」と声をかけています。

とはいえ、最初から順風満帆だったわけ

ではありません。「働いた経験のない人や障がいのある人は、一緒に働くために工夫が必要。そうした人をわざわざ雇用する意味は何や」と言われてしまいます。

野々村さんは、この言葉を「地域の危機」ととらえました。20年前、人口減少が叫ばれ、このままいけば地域経済の崩壊が目に見えていました。でも、地域経済を担う地域の社長たちが、「１日８時間フルタイムで働ける経験者」など、自分たちの求人に合致する人しか雇用しないという考えでは、地域経済、果ては地域が崩壊すると考えたのです。

地域祭りへの出店

Tekito-と出会った以上は、「社長の会社は絶対につぶさない」と話し、Tekito-の働きもんとの出会いで、社長が変わり、企業風土が変化していきます。現場で働く人が、「午前中、彼ら・彼女らが手伝ってくれることで、ほかの仕事ができるようになった」と声をあげてくれたことから、午前中だけ、一日のうちの朝の１時間だけ、という求人の幅ができてきました。

「障がいのある人の雇用を達成しましょうという目標ではなく、『社長の会社が、この地域で100年後もええ会社やな、従業員たちもこの会社で働いてよかったなと思う会社づくりを一緒にやろう』と言っています。地域にずっとあり続ける会社にしかできない、働きもんの応援の力です」と野々村さんは断言します。

社長から見える景色とは？

Tekito-では、ケース会議を「応援団をつくるわくわくタイム」と考えています。本人の行動を問題行動ととらえると、「本人の生活を変えなければならない、本人のことを問題行動を起こさないようにしなければならない」と考えがちですが、Tekito-では、まず本人の思いに「共感する」ことからスタートします。

お疲れさん会

Tekito-では、本人から見える景色を考え抜くことは前述のとおりですが、企業の社長から見える景色は、「その人が働く姿」だと言います。「ある会社の社長は、働いたことのない人の履歴書を見て、『(職歴がなく何も書かれていないので)きれいやな。うちの会社が最初にそこに入るんや。辞めてもらったら困るな』と言いました。その人が働く姿を社長と一緒に想像して、一緒に見ることが大事だと思っています」と野々村さんは話します。

「働く」は人生の一部分

地域の古民家に集まる

「働く」だけでなく「暮らし」も応援するために、「そこにいれば誰かがいて、気になることを聞けたり、しゃべったりして過ごせる場所がほしい」と考えた野々村さん。さっそく応援団の社長たちに相談をすると、ほどなく物件を見つけてきてくれました。

野々村さんが出した条件は、「できるだけ結束の強い地域であること」。地域の人同士が顔見知りで、昔ながらの人たちの強いつながりのある地域を希望したそうです。

そこには、働きもんを応援するだけでなく、もうひとつの意味が込められていました。「若い職員は、家に固定電話がなかったり、ご近所づきあいを経験したことのない時代に育ってきています。そんな環境で生まれ育っている彼ら・彼女らでなくても、『地域を耕す』ということは簡単なことではありません。しんどい、でもその先にとてもおもしろいことがある。そうしたことを経験してもらいたかった」と言います。

たとえば行き場のない出所者がこの民家に来て叫んだりすると、そのことを近所に話に行かなければなりません。話に行くためには、普段からあいさつをし、関係性をつくっておく必要があります。「職員の自治参加の練習の場所であり、ここで地域に入り込む練習をしてもらう。苦情が来たらみんなで謝りに行きます」と野々村さん。

宴会をしたり、一人暮らしをしたことがない人がそこで住まう練習をしたり、DV 親子のシェルターとなり、働く場所を見つけてここから仕事に通ったり。

いつの間にか、「誰かがトイレットペーパーを持ってきてくれていたり、布団を持ってきてくれていたり。ただお昼を食べているときもあれば、相談に使うことも」。地域の古民家に優しさと気にかけ合いが持ち寄られる、そんな場所に育ってきています。

60 歳を超えた働きもんの場所

約 20 年間のひきこもりののち、Tekito- 設立当時の 18 年前に知り合い、就職した人たちが 60 歳を超えて、定年を迎え始めています。がんばって働いてきていても、なかなか自分の地域とのつながりを持てずにいます。定年後の居場所を考え、企業の社長たちが株式会社を設立し、農業を始めました。ビニルハウスをたてて、収穫した野菜は道の駅やホテルへの納品も決まっています。

出会ったときが 60 歳、という人もいます。この年齢から草刈りに出るのではなく、「ちょうどいいタイミングで出会えた」と、農業を手伝ってもらっています。

人口減少から、このままでは地域が崩壊するかもしれない、という危惧もあるなかで、「ひとり勝ちするのではなく、ちょうどいい場所までみんなで降りられることが大事」と野々村さん。「この人たちが自宅にいたからうちの地域が守られている。そう考えると、働いているかいないかではなく、この人が地域の応援団になるんです。応援する人も、される人も、一緒くたの地域、それがいいんだと、地域が学んでいるんです」。

孤立を防ぐ「地域づくり」実践 東近江圏域働き・暮らし応援センター “Tekito-”
2022 年 12 月 15 日開催号

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「社会的孤立の解消に向けた地域づくり人材養成事業」
発行元：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
〒 981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1 階
TEL 022- 727- 8731 FAX 022- 727- 8737
https://clc2022jinzai.wixsite.com/sitetop